

社会科学の知的構築のための基本的課題の再検討

東京工業大学 出口弘

1 社会の状態と機能

社会科学に於ける知的構築については、その自然科学と異なる特質について様々な議論が歴史的に行われてきた。そこには自然科学的知的構築原理への強い憧憬と依存がある。他方で人工物としての社会を自らデザインし構築する必要がある時代に、社会の「状態」やその上で可能となる「機能」や人々の「認識」や「活動」そのものを対象とする新しい意味での構築主義的方法が求められる。

本稿では人工物としての社会の「状態」「機能」及びそこで生きる人々の「認識」や「活動」そのものを我々がデザイン・構築するという視点での新たな構築主義的方法を基軸に、社会科学に於ける知的構築の為の課題の再検討を行う。

【モデリングサイクル】

自然科学を含む諸学での数理的モデル作成のプロセスは、対象となる現象から何らかの観点に基づきモデルを作成し、それを現象の分析に用いその妥当性を検証し、さらにモデルを改善するという一種の循環的な活動となる。このモデル作成のプロセスはしばしばモデリングサイクルと呼ばれている。モデリングサイクルはモデル構築の方法論のプロセスとして、科学哲学的な問題意識とは別の形で、社会科学を含む科学者自体によって広く認識され議論されてきた。このモデリングサイクルに関する方法論では、よいモデルをいかに構築するかという実利的な視点からモデル構築のプロセスが議論される。それゆえ第一哲学の理念の中で課題となる厳密学としての認識論的な基礎づけ、或はクワインが自然化された認識論の中で論じたような基礎づけの循環にどう答えるかという問い掛けはなされない。また科学的な知とそうでない知を区分するディマーケーションの問題意識も希薄である。

他方でモデリングサイクルのプロセスでは、自然科学を対象に数学的なモデルを策定する場合と、社会科学の対象に対するモデルを構築する場合とはしばしばそのサイクルの構成要件が異なる。社会や組織を対象としたモデル構築では、現象からのモデルの抽出とそのモデルを用いた現実の説明、説明の妥当性の検証という、自然科学で用いる通常のモデリングサイクルの枠組み以外に、別種のプロセスが付け加えられている。まずモデルを用いて解くべき問題状況と問題状況への主体の関与が課題となる。モデルの策定者だけでなく、当該のモデルが対象としている状況に含まれている主体自身による自らを含む状況への理解と状況への関与がモデルの作成にとっての第一義的認識関心となる。更にここでは当該の状況に含まれている主体自体の認識をどう扱い、その認識が組織学習や社会学習等によって変容するプロセスの既述がモデリングサイクルの中で課題となる。社会科学のモデリングサイクルの例としてしばしば援用されるP.Checklandにはじまるソフトシステム方法論は、この拡張されたモデリングサイクルの一つの典型を与えてくれる。経営学でしばしば援用されるPDCAサイクルは、問題状況への関与を基軸とし如何に組織の中で学習のサイクルを回すかに関するモデリングサイクルであるといえることができる。近年ではエージェントベースモデリングやそれに基づく社会シミュレーションの領域でも、社会科学のモデリングサイクルの議論を更に発展させた議論が行われている。そこでは社会科学でのマイクロ・マクロリンクの議論に対応する形で、社会的現象に対するマクロな現象論的モデルや統計的なモデルに対して、当該の社会的現象へ政策的に介入するための介入水準に適合する形で、よりマイクロな或はメソスケールな認識関心を設定し、それにあわせてマクロな境界条件をより詳細に展開し必要な水準のモデルを構築するという新たな方法論 (Boundary Unfolding)が提唱されている。そこではまた社会的対象に対する異なる認識関心に応じた複数のアスペクトに基づくモデル化を、種類の異なる状態空間からなるサブモデルを合成して全体モデルを構築するというシステムの合成問題として扱う。これは既存の均質なモデルの合成問題とは異なる新たなモデル構築の方法論的課題を惹起する。これらのモデルの扱いに関する方法論的議論には、政策的な介入水準に併せた境界条件でのモデル作成、システムの階層性、複数の認識関心を練り込んだマルチアスペクトのモデル策定など、社会科学に特有の課題が多く含まれる。さらに当該の問題状況のステークホルダーが状況に対して介入するため知を構築するためには、複数の動的シナリオを介入可能な水準の概念で構築し、そのシナリオの導出過程も含むモデルの妥当性と政策的代替案選択について討議することのできる開かれた知の運用もまた求められる。これらの課題に答えるには、自然科学的な法則を前提とし、与えられた機能的な仕様記述に基づいて人工物を設計するという意味での狭義の人工物の科学を越えた、社会科学の知的構築の人工物としての構築主義的方法を必要とする。

【社会科学に固有のモデル化の課題】

社会科学の対象のモデル化に関する認識関心は、社会科学に於けるモデルの構築に関して自然科学にはない固有の課題を投げかけている。そもそも主体をその内を含むシステムのモデル化では、その含まれる主体の意思決定を自然科学の様に一般法則化として定式化することには困難がある。当該のステークホルダーに

対しそこでの政策介入に関する意思決定の資料を討議空間へ投げかけるはずの理論が、当該の主体の行動プロセスを一般法則として組込む事は社会科学では広く忌避されてきた。その代わりに計量的予測のためには、マクロな統計的計量モデルといった現象論的法則が発展する一方で、ミクロの意思決定については方法論的個人主義に基づく合理的意思決定モデルが多く用いられてきた。これは「合理的」であろうとするなら振る舞わざるを得ない意思決定の制約条件を法則として扱うもので、合理的意思決定論やゲーム理論等はこの考え方で構築されている。それでも意思決定原理の差によってバリエーションは生じる。しかし近年、この方法論的個人主義から乖離し、人間の意思決定の性向を脳の性質に基づく法則科学として扱おうとする、神経経済学や脳経済学という領域が出現している。それは一つの学問の在り方としては首肯できるが社会科学が扱ってきた方法論的個人主義や合理的意思決定の枠組みとの齟齬に関する方法論的議論無しに自然科学の立場に依拠することは方法論的にナイーブであると論難されても仕方が無いであろう。

2 社会のリアリティの再構築とリアリティの持ち上がり

自然科学での状態概念は、因果概念と共に数理的なモデルの記述では基本とされる概念である。何らかの動的なプロセスをモデルとして記述するには、入出力システムとして記述する方法と、状態概念に基づき状態遷移の時間発展の動的プロセスを記述する方法の二種類の方法がある。自然科学の歴史は、分子運動や熱力学、電磁気学から量子力学まで様々な領域での状態概念の構築の歴史は、自然科学的对象物の構築の歴史でもある。そこでは素朴な自然科学的現実の概念の拡張が行われてきた。

他方で社会科学のモデル構築の方法論の中で、十分に主題的に取りあげられていない事柄に、社会技術複合体の中で、社会や組織の「状態」「機能」及びそこで生きる人々の「認識」や「活動」という社会的現実そのものが大きく変化するという新たな現実の出現への理解と分析、問題状況への介入が挙げられる。社会的な現実の大きな変化を如何に主体的に捉え、それをデザインしその方向性に介入することができるかは、組織や政府の通常の問題解決の意思決定の範囲を大きく越え、既述の課題解決への介入やシナリオ構築とは次元のことなる課題となる。このようなリアリティの大変動は、人類史の中では農業革命や、枢軸の時代の世界宗教の成立等多く挙げることができる。また産業革命以来の地球社会は、幾つかのステージを経ながらリアリティの大変動の渦中にある。直近でもインターネットの成立は、社会的相互作用の在り方を根底から一変させてしまった。このようなリアリティの大変動を本稿では、リアリティのあるステージから別のステージへのエレベーション（持ち上がり）と呼ぶ。現実の在り様が新たな状況へと持ち上がり世界が一変する。これは生物の進化とも技術や社会のイノベーションとも異なる固有の社会科学的課題である。それ故にこそこの現実の「持ち上がり」を理解し分析し関与するための新たな社会的人工物の科学が必要とされる。

【技術社会複合体の中での機能と状態の構築のスパイラル】

社会学論の中では、社会に於ける知の地平の循環の問題が古くから議論されてきた。これはフッサールによる『危機』草稿での「幾何学の起源」の議論、そのP.リクールによる解説、ガダマーによる解釈学的循環の議論のように従来広義の「解釈学」的コンテクストで行われてきた。他方で自らの活動する地平の技術や制度などの諸機能と機能の前提となる諸状態概念を再構築するという事についての認識は解釈学にとどまらない。例えばハートの法社会学では、法に於ける規範の制度化とそれが新たな規範の地平となるというプロセスを、法社会学的な視点からの広義のフィードバック的循環の課題として扱っている。リアリティの大変動が続く産業革命以降の近代社会を理解するには、科学技術が可能とした社会の状態や機能の新たな地平が人々の認識や活動の変化を経て、制度や技術を更に変化させていく螺旋状の変動プロセスを理解する必要がある。だが例えばラトゥールは、技術社会複合体を扱うが、そこでは社会に於ける新たな機能や状態の出現と、それが可能とする人々の認識や組織の機能や役割の革新と、それがさらに可能とする新たな技術や制度の地平といったスパイラル上の変化に関する意識は希薄である。

この機能と状態の構築と再構築のスパイラルの中で、社会の「状態」「機能」及びそこで生きる人々の「認識」や「活動」が変化していくプロセスを、社会に関する学の方法論は正面から論じる必要がある。ここでは、我々が埋め込まれている地平としての技術社会文化複合体が次の現実へと持ち上がる中で、状態と機能が常に再構築され新しい現実が形成されているというエレベーションのプロセスそれ自体が課題とされる必要がある。そこでは主体が古い現実からの脱埋め込みと新たな現実への再埋め込みが如何に行われ、それを我々が如何に把握しマネージするかを問わねばならない。これらは与えられたリアリティの中での課題解決とは異なる新たな社会科学的な知の構築の課題として捉えられる必要がある。

現実のエレベーションのプロセス解析と、それを理解・分析・介入・管理するための知のマネジメント論の構築が、様々な異なる社会科学に通底する共通の方法論的課題として認識される必要がある。

以上